

2 馬堀中組遺跡 工事立会出土遺物 資料紹介

諫山えりか

(1) 遺跡の位置と環境

馬堀中組遺跡は、新潟市西蒲区馬堀（旧卷町）に所在する。新潟平野の南西部に位置し、大通川と飛落川の間の南北に伸びる自然堤防の東側に立地する。近接して館ノ腰遺跡や、地蔵越遺跡、馬堀上組遺跡などいずれも自然堤防上に立地する古代・中世の遺跡が点在する。

当地は古代には蒲原郡であり、卷町周辺に5つあったとされる郷のうち、桜井郷か日置郷の可能性が高いとされている。

なお、東へ約5km離れた下新田遺跡で「日置」と書かれた墨書き器が発見されている〔新潟市教委2015〕。さらに離れてはいるが、林付遺跡において「川合庄」とこれまでの文献に記載のない初期荘園の発見事例もある〔新潟市教委2012〕。また、鎌倉時代には源頼朝の知行国であったとされるが、実際には在地の領主層優位の支配が行われていたと推測されており、中世の卷町周辺は弥彦荘であったとされる〔卷町1994b〕。

(2) 発見の経緯とこれまでの調査

遺跡は、令和元年に実施された馬堀地区における圃場整備事業に伴う試掘調査で井戸と白磁碗が発見された。この時、同じ自然堤防上で南に約1.2km離れた地点で同じく中世の馬堀上組遺跡が発見されている。

原因 経営基盤体育成事業 馬堀地区 区画整理事業

第1次工事

期間 令和3年4月8日～4月10日 3日間

面積 約150m² (幅1m×長さ150m)

担当 講山えりか

令和2年度（令和3年2月）から排水路工事の立会を始めたが、排水路部分では遺構・遺物は確認されなかった。天候等の関係で、用水路部分の工事は令和3年度に行われた。

耕作土直下から遺構が確認できることから、掘削に際して耕作土除去（深さ約30cm）で一旦掘削を止めて遺構の有無の確認・土層堆積の観察・写真撮影を行った。その後、工事の予定深度1mまで掘り下げて管を敷設する流れで立会作業を行った。遺構の位置の測量は行っておらず、遺構が確認できた場合は工事の掘削幅を頼りに西もしくは東端の近いほうから距離を測った。

また、遺構が調査区外に広がっていた場合、壁面で断面の記録を作成したため、断面図は必ずしも中心で半裁できていない。なお、施工は南から北へ進められ、立会

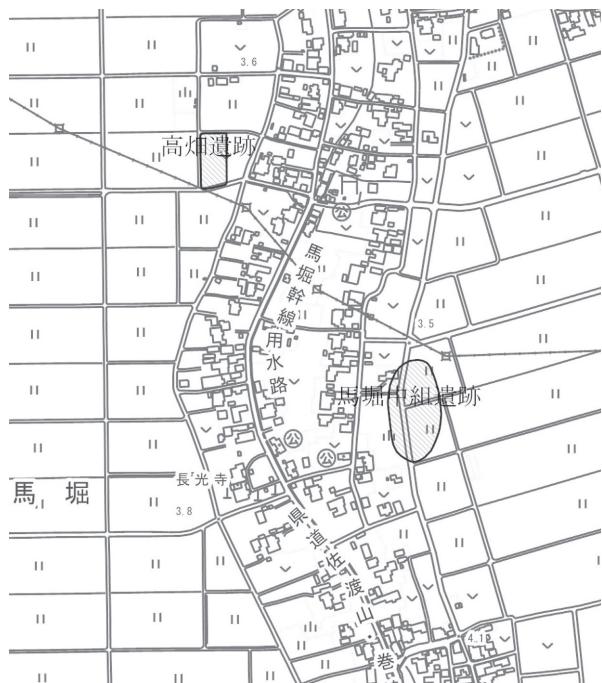


図1 遺跡位置図 (1/10,000)



図2 立会位置図 (1/8,000)

V

研究活動
資料報告・研

を開始した地点を起点とし（図2参照）、その日敷設した管の本数を数えて起点からの距離を計算している。管長は4mで、通常は1日20本前後敷設するとのことであったが、今回の立会時では1日14～16本のペースで進んだ。ご協力頂いた事業者並びに施工者には改めて感謝の意を表する。

層序 基本層序は次のとおりである。

I層 褐色粘土 水田耕作土 粘性・しまりあり

II層 灰色シルト質粘土 粘性・しまりあり

III層 灰白色粘質シルト 粘性・しまりあり

工事前の田面高は約3.1mである。起点から24m地点まではⅡ層が確認されたが、その後76m地点まで耕作土（I層）直下にⅢ層が検出された。Ⅲ層は試掘調査時のIV b層に相当すると思われ、今回の立会でも上面で遺構を確認した。またⅡ層とした灰色粘土層からは中世の遺物を確認できず、遺物包含層かどうかは不明であり、また試掘調査時の層序との対応関係も把握できなかった。

Ⅲ層は起点から76m地点あたりから次第に北に向かって緩く傾斜し始め、起点から約150m離れた立会終了地点では地表面から-0.9mでⅢ層上面が確認された。

(3) 遺構と遺物

起点から56~104mの間で遺構を確認した（図3・表1）。中世の遺物が出土していないものもあるが、検出時の覆土の色調や土質が中世の遺物が検出された遺構とよく似ていることから、中世の可能性が高いものとして記載する。遺構の大きさ等については表1を参照していただきたい。

性格不明遺構（SX1） 工区外まで広がっていたため全形を捉えることはできなかったが、平面は直径1.8m程度の円形、深さ0.6mと推定される。最下層はかなり軟質な粘土であった。

遺物は、1層から青磁片、3層から瀬戸美濃焼の鉢皿が出土した。青磁は小片で器種不明のため図化しなかったが、器壁の厚さが6mmと厚く、内外面に緑灰色の釉薬がかかり、文様の一部が確認できた。

瀬戸美濃焼の鉢皿（図4-1）は、底部回転糸切りで内面に鉢目が刻まれている。釉薬は灰色で浸け掛けである。底部は歪んでいる。立ち上がりは緩やかで、外面はロクロナデである。形態から古瀬戸中期で14世紀代と思われる。口縁部は残っておらず、内側から打ち欠いた痕跡が見られた。内外面や断面に炭化物が付着していることから、口縁部が欠けた後に底部の立ち上がり付近から打ち欠いて概ね丸くなるように整え、その後灯明皿として転用したものと思われる。

井戸（SE3） これも工区外まで広がっているため全形は不明である。井戸側ではなく、試掘調査で発見された井戸に比べて浅い。

1層から珠洲焼の甕肩部と擂鉢胴部の破片が1点ずつ出土した（図4）。甕（図4-2）は頸部で欠損しており、破片が小さいため本来の大きさは不明である。器厚が薄く、壺の可能性もある。

擂鉢（図4-3）は体部上半部であり、これも小片のため本来の大きさは不明である。擂り目は10条を1つの単位として施されていた。吉岡編年〔吉岡1989〕3期頃のものと思われる。

遺構外 大半の区間で遺物包含層が削平されていたこともあり、遺構以外からの出土遺物は極めて少ない。中世土師器の小片が1点確認されたのみである。Ⅲの体部破片で、胎土はきめ細かく軟質であり、ロクロ形成と思われる。このほかには近世陶磁器の小片が数点出土したのみで、全体に遺物量は少ない。

(4)まとめ

立会の結果、試掘調査の結果と同様に古代の遺物は確認されなかった。確認できた遺構・遺物は中世以降のものであり、概ね室町時代（14世紀代）におさまるものと思われる。遺構は試掘調査時と合わせると井戸や土坑などもみられることから、短期間ではあるが集落が存在していた可能性が高い。

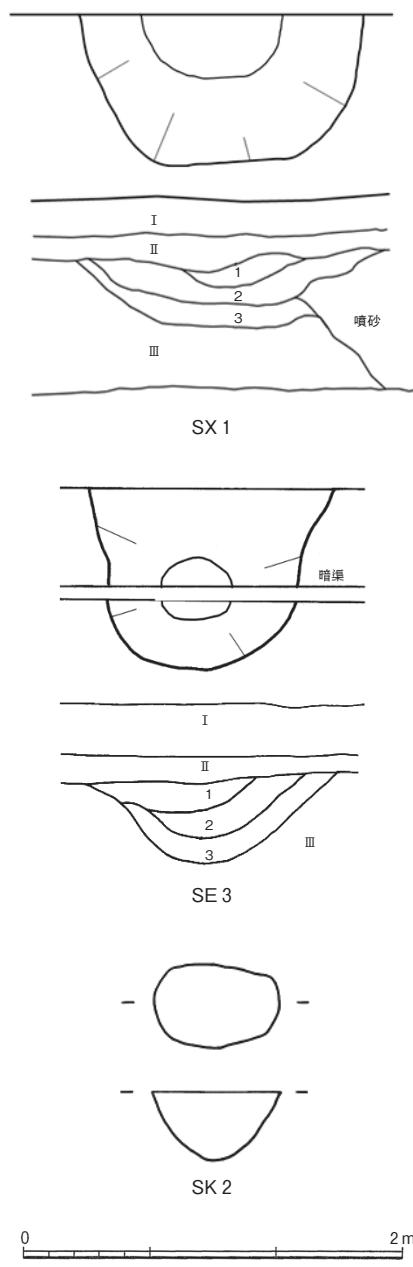
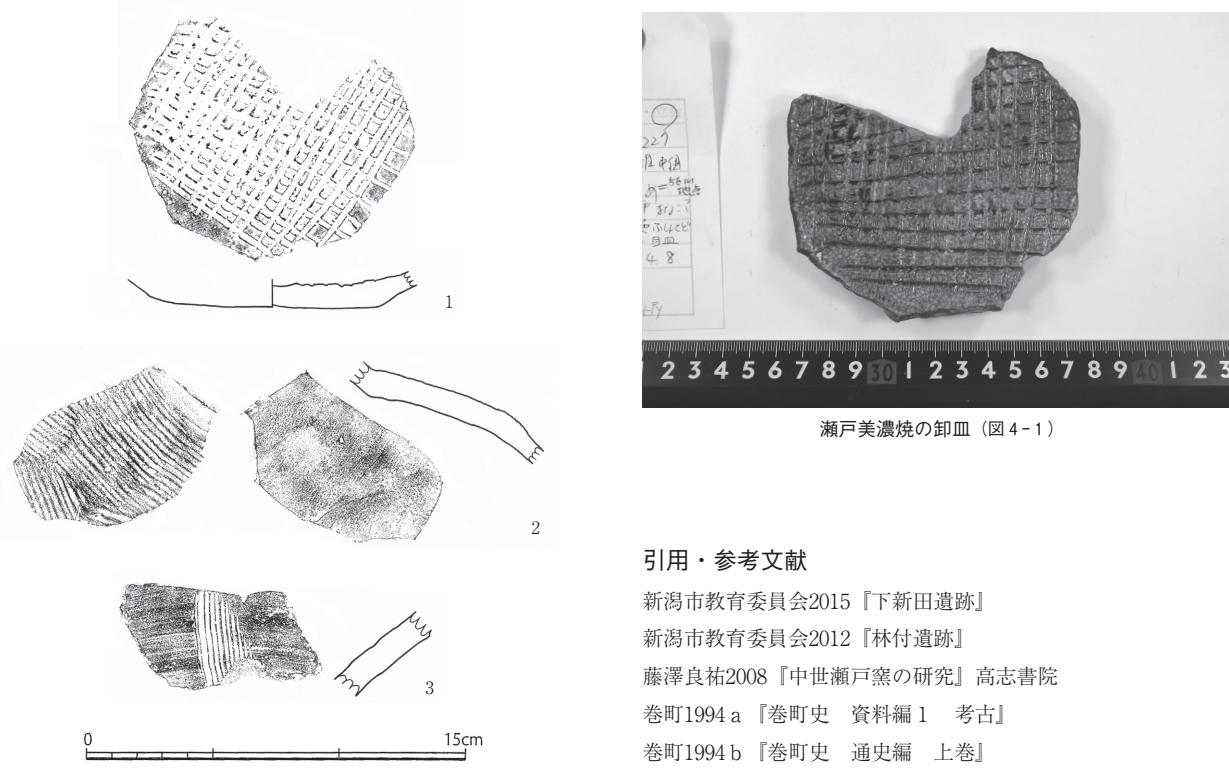


図3 遺構平面図（1/40）

表1 工事立会で確認された遺構一覧

地点	遺構種別	残存する大きさ	土層	出土遺物
起点から56m	性格不明 遺構 1基 (SX 1)	長軸1.8m 短軸不明 深さ0.6m以上	1 褐灰色粘土に灰白色粘土ブロック混	青磁 器種不明 (1層)
			2 灰色粘土に褐色錫混	
			3 褐灰色粘土に灰白色粘土ブロック混 部分的に炭が薄い層状に混	瀬戸美濃焼 卸皿 (3層)
			4 灰色粘土	
起点から60m	小土坑 1基 (P 4)	長軸0.3m 短軸0.3m 深さ 半裁しておらず不明	1 褐灰色粘土	なし
起点から96m	土坑 1基 (SK 2)	長軸0.6m 短軸0.4m 深さ0.5m	1 黒褐色粘土に褐灰色粘土ブロック少量混	なし
起点から104m	井戸 1基 (SE 3)	長軸1.2m 短軸0.9m 深さ0.55m	1 黒褐色粘土に灰色粘土ブロック多量混	珠洲焼 甕・擂鉢 (1層)
			2 黒褐色粘土	
			3 灰色粘土に黒褐色粘土ブロック少量混	



引用・参考文献

- 新潟市教育委員会2015『下新田遺跡』
 新潟市教育委員会2012『林付遺跡』
 藤澤良祐2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院
 卷町1994 a 『卷町史 資料編1 考古』
 卷町1994 b 『卷町史 通史編 上巻』
 珠洲市立珠洲焼資料館（吉岡康暢監修）1989『珠洲の名陶』

図4 出土遺物 (1/3)



調査地近景（南から）



起点から60m地点土層（東から）



SX 1 検出状況（東から）



SX 1 土層断面（西から）



SK 2 検出状況（東から）



SK 2 土層断面（東から）



SE 3 珠洲焼出土状況（東から）



SE 3 土層断面（東から）